

**貧困に対するペダゴジックなまなざし**  
——学校教員のそれについての事例的把握及び理論的考察——  
長谷川 裕 (琉球大学)

本報告は、学校教員が貧困や貧困層をどのように見ているかを、後述する調査の結果に基づいて描き、それに依拠しながら、貧困や貧困層に対する「ペダゴジックなまなざし」が今日どのようにあるか、なぜそのようなものがあるのか、それはどのように変わっていくべきであるのか、その可能性はどのように存在しているのかなどの論点について、理論的に考察してみたいというのが、その問題意識となっている。ここでいう「ペダゴジック」とは、B.バーンステインの「ペダゴジー」概念に依るものである。バーンステインの言うペダゴジーとは、誰かがほかの誰かに何かを伝え、その結果後者に何らかの変化が生じるという相互行為のことであり、「教育」がその代表的なものだがそれに限らず、例えば福祉的な実践などもそれに当たる。貧困や貧困層に対する「ペダゴジックなまなざし」とは、ペダゴジーを遂行するという社会的位置にある人々の、その位置にあることに伴ってもつに至っている、それらに対する見方という意味である。

報告者は、北日本の地方都市 B 市の大規模公営団地 A 団地とその近隣地域をフィールドとする共同調査研究プロジェクトに参加してきた。A 団地は、生活保護世帯など「生活困難層」（この共同研究で用いてきた言葉で、以下本稿でもこれを用いる。その意味は「貧困層」とほぼ重なる。）が集住する大規模公営団地である。共同研究は、その A 団地居住の生活困難層の家族の生活と子育て・教育の困難の実態、その世帯の子ども・親と学校との関わり、団地居住者間との関係などについて明らかにしていくことを目指したものである。大きく分けて、バブル経済期からその崩壊直後にかけての 1990 年前後と、格差社会化の進行やそれに伴う貧困の増大が重要な社会問題としてクローズアップされるようになった 2010 年前後の 2 期にわたって実施された（以下、それぞれ第 1 期調査、第 2 期調査）。

第 1 期・第 2 期調査いずれでも、その一環として A 団地地域に立地する公立小中学校とその教員を対象とした調査が実施された。第 1 期の教員調査で明らかになったのは、学校教員の生活困難層に対するまなざし方として、(ア)生活困難層の家族・子どもを学校の困難の原因と見なす（生活困難層の子どもの抱える課題と取り組み、それが首尾よくいかない場合、その原因をこの層の親・子どもに見出そうとする）か、それとも(イ)生活困難層の直面している問題を直視しない（A 団地地域は他地域と特に違いはないとして、問題が問題として存在していることを認めようとしない）かという、問題把握の 2 項構図であった。

第 2 期調査で明らかになったのは、同様の構図が依然見られるとともに、生活困難層の人々それぞれが直面する困難状況の個別具体性に応じようとして、そのためにも自分たちの観点・基準をも相手に応じて変えていこうとするスタンスが見出されるということだった。だが、ある人を取り巻く状況や、さらにその背後にありそれを規定する構造は、その人が自立的・規範的な主体たろうとすることで乗り越えられる

《第2分科会》  
貧困観とその変容—今、どんな思想が必要か

はずだ・乗り越えるべきだという指向性を帯びた見方も存在していることが伺われ、その見方が上のスタンスを不徹底なものにしている点が推測された。

大会当日は、調査から得られた以上の知見についてデータを紹介し具体的に示すとともに、そのインプリケーションがどのようなことなのかを明確にしつつ、貧困をめぐる先行する諸議論を参照しながら、冒頭に述べた諸論点についての考察を行っていく。特に考え論じたいと思っているのは、貧困や貧困層に対する「ペダゴジックなまなざし」は、J・ヤングの言う「他者化」（ペダゴジーの対象となる者たちを、問題を抱えた、「われわれ」と異なる「他者」と見なす）という性格を帯びやすいが、しかしその他者化は「リベラルな他者化」（問題発生的主要原因をその人に見るのではなく置かれている状況に見る）であることは少なくなく、さらに「見下し」を免れたものとなり得る（そうなれば、ヤングの他者化とは異なる性格となる）可能性はあるということであり、その上でさらに、貧困者を「他者」と見ることと「われわれ」と同じと見ることとの関係をどう見るべきか、かれらを「自立」へと導こうと働きかけることをどう位置づけるべきか、などの論点についてである。